

国木田独歩の佐伯での生活

(二)

山内武麒麟

(賛助会員・佐伯市城下東町)

二日の記を見ると、午前中に中根氏を訪ねてみると留守であった。これは中根氏から同道して貰って毛利家に着任の挨拶へ行く予定であったのである。

午後坂本氏が来訪し、三時から鶴谷学館に行き幹事の入々と初対面して挨拶し、学課のことについていろいろと打合わせをした。

この坂本氏は名を永年といい、当時百九銀行の取締役をしていて、鶴谷学館の幹事の一人で館長を兼ねていた。独歩兄弟はこれから間もなく同氏の好意で同氏の宅に下宿することになった。

鶴谷学館は旧藩主毛利高範子爵の厚意によって設立された私立学校で、子爵は毎月三十円ずゝ補助していた。

佐伯にはこれより以前に南海中学校という公立中学校が

あったが、明治十九年の学制改革によって中学校は県下に大分尋常中学校唯一校だけになり、他の中学校は全廃校となった。南海中学校は開校後僅か五年で廃せられたのである。その後中学校はなく小学校を卒業しても上級学校へ思うように進まれず、進学を志望するものは笈を負うて大分の町まで行かねばならなかった。そのためにこの鶴谷学館は毛利子爵の肝入りで中等教育の唯一つの補充機関として明治二十三年に設立されたのである。しかし四十二年頃廃校となっている。設立された場所は新屋敷で、昔こゝにあった絲繰工場を改造して校舎として使用していたとのことである。

次にこの十日間の生活を反省して記してある。

吾をして十日間の満腔の感慨を吐かしめよ。

と、書き出して、反省している。この十日間はまことに多忙であつた。しかしその間、自分はいつも受身であつた。色々と見たり聞いたりしたが、たゞうろろするだけの受身で暮した。人々との応接に追われて、自分自身が主体になつてものを考え、処理し、奮発することは一つもなかった。

と、強く反省し、悔んでいる。

三日の記には、一日の記に「二十六日は河手氏を訪ふ、帰路有光里嬢の墓を弔う」とあるこの墓参りのことを記してある。

河手氏を訪問した際、有光里嬢の亡くなった事情を詳しく聞いてまことに哀れに思ひ、帰路河手氏の細君の案内でその墓に詣でた。

少女の墓は小高い丘の頂にあつた。その麓に小川があり水は清くて浅く、川の土手は緑に覆われて長い。細君はこの川を見て云つた。「小川は少しも変わりが娘はもういない。この川はあの娘が一日中遊んだ川である」と。その時一人の男の子が石橋の上から身を躍らせて砂の上に飛び降りた。それを見て細君は「あの娘は活潑な

子でよくあのように橋から飛び降りていた」と語つた。頭をあげると、小丘はすぐ前にあつて白い石の墓が小さい木の上に頭を出していた。道端には蕎麦そばの花が雪のように白く咲いていた。細君と萱をかき分け小松をかき分けて頂に登り墓を拜んだ。そこで細君と別れて一人で墓の傍にたゞずんだ。今は夏の終り秋の半ばで清らかな光が下界にみなぎり、見渡すと田野は黄金の毛氈モヘを敷いたようである。

細君からこの少女の思ひ出話を聞き、嘗て可愛いがつた娘の墓の傍で、静かなあたりの景色を眺めながら色々と考えた独歩の胸中はどうであつたろうか。その感懐を

嗚呼少女は逝きぬ。而して自然は依然たり。其の美は依然たり、美の化身なる少女は逝きぬ。今決して見るべからず、而して吾茲に立ち、自然は依然たり。天は悠々として窮まる処を知らず、雲は漠々として無心の姿を保つ。

と、記してある。少女の死を悼みながら、人の死と自然の不変とを考え合わせて心から悲しんでいる。

この有光里という少女は吉見家の次女ハルと大の仲好しであつた。独歩が二十一、二歳の頃、即ち国木田一家

が吉見家に寄寓していた頃に、ハルと共に可愛がついた少女である。河手氏の細君の実家の娘で姪に当たるのである。小学校時代に夭折した。

四日の記を見ると、

昨日始めて学舎に出席し二十余名の生徒に向ひ、開講並びに初対面の詞を述べ、日課を定めて帰る。と、ある。十月三日から学館に出勤している。そして次に

吾をして少年を愛せしめよ。アゝ吾をして少年をあやましむる勿れ。

と、教師として始めて教壇に立つ生徒に向つた独歩は、少年たちを愛さねばならない。少年をあやまらしてはならぬと深く自覚し、念願している。

この日の夕暮弟収二と一しよに町中を散歩し郊外に出て夕闇をたどりながら城山の後まで行っている。道々弟に、時代をはなれ、境遇からはなれて一段高いところに人間の真生命があることを語り、自然の児として神に直接接すべきであること伝え、「三百年の後の人のために書す」と云うことの意味を話した。

この「三百年の後の人のために書す」というのは、独歩が過ぐる九月十九日にこの題で論文を書こうと考えた題である。

夕暮の雲が漠々と空を覆って暗い。弟の云うには「夜！ 夜とは不思議なるかな。夜とは何ぞや」と。それで自分は、凡ての自然は神秘なものであることを語り、物質論でものを規定することはまことに浅はかであると話し、カーライルの云うところの火とは何ぞやの語を用いて、自然には必ず深い意味をもっていることを教えた。

そして次に自然観を記してある。

アゝ吾人の見る処は自然の変化の一部分に過ぎず。火や水や、石や、金や風や、草や木や、花や、雪や、月や、光や、春や、夏や、秋や、冬や、実に大自然の一部分に過ぎざる可し。されど此の恐ろしき流動、呼吸、変化、を保つ自然の中に吾の分立するを思へば実に悚然たらざるばあらず。

と、自然の偉大さを叙している。独歩はこのように自然の神秘に驚きまたその動き、変化に恐ろしさを感じている。独歩はたゞ一途にこの自然の深奥をつかみたいと思

っている。

五日の記には

雨降ること蕭々たり。

昨日より始めて授業す。三時半（午後）より下級生のためにナショナル読本二の巻を授く。四時半よりリーディングを授く。午後八時半より代数学を授く。九時半より上級生のためにスキントン万国史を講ず、以て日課を了はる。

と、ある。鶴谷学館は二部教授で、午後三時半から五時半まで下級生、暫く休んで夜の八時半から十時半まで上級生の授業であった。これは上級生の生徒の中には職業に従事していたものが多かったからである。

独歩は英語と数学とを担当し、一週間に二十三、四時間の授業を受け持っていた。代数の教科書はチャーレー・スミスの訳書を用い、万国史は原書を使っていた。

授業を終って家に帰り机に向って、

以て日課を了はる。然りパンの為に働きたる日課は了はりぬ。されど果して吾が天職に尽す可き日課は了はりたるか。

と、記してある。パンの為に働いた日課は終わったが、自分の天職につくす日課は終ったかと反省している。

嗚呼 天職！ 天職！ 詩人としての天職は難き哉。と、嘆いている。独歩は詩人として尽すことを天職と考えている。そして自分は詩人としてこの世にあり、詩人としての天職を完うすることが出来ないなら、むしろこの生命を呪いたくなる。自分は日々夜々何を追い求めているのか、何が楽しみか、何が喜びか。人生を考え、自然を慕い、人情を思い、神を仰ぎ神の愛を思うことの出来ない生命なら呪うべきである。

と、今の自分の生活を反省して、

嗚呼爾、起てよ、めざめよ。詩ならざるはなく、教へならざるはなし。

と、思い直して奮い起っている。そして、自分の一日のことをじっと考えて見ると一編の詩になる。秋雨を聴きながら友をなつかしむ。これもまた一編の詩となるではないか。二十七日の夜父に送られ藤形さんと一しょに、おぼろ月の下を限らない感慨に打たれながら、岸の下港の角屋に行き、藤形と弟と三人で燈下で汽船を待つことも、また老いた父のこと、朴訥な男のこと、楽しそうな夫婦

など、彼らの生涯のこと。多感で物思いに耽ける青年、無邪気な少年、みんなこれらは一編の詩になるではないか。また過ぐる二十五日の夜、明月の下を岸の下港に散歩して埠頭の上から見た満潮など、じっと眼をつむって考えてみると、これも思い多い情の深い詩となるではないか。そして

詩や、詩や、豈に遠きに在らんや。吾をして只だシンセリティならしめよ、沈思せしめよ、悉く詩ならぬはなし。

と、自覚している。

人生を説明し、自然の美を伝え、天地の神聖を説き、自由、敬虔、平和、威厳を教えることが詩の目的であると詩を定義し、自分には眼があり魂があり、熱血が満身にあり、また一片の冷静な心もある。

神よ、神よ、アゝ神よ、吾をして起たしめ給へ、めざましめ給へ。

と、奮起を神に祈っている。独歩はこのように自分の天職は詩人としての本分を尽すことを考え、大いに精進しようとして決心している。

この日友人の大久保余所五郎に次のような手紙を出し

ている。

九月三十日恙なく佐伯着、爾後万事好都合に運び一昨日より授業を初め候

到着後兩三日は言ふ可からざる一種の圧抑を感じ万事不平のみに不愉快極まり候へ共、今は不思議にも多少土地にもなれて為す可く雇はれし仕事文けはあたり前に務め居候 未だよく知不申と雖も先方も余り不満にも非ざるが如く思はれ候 東京に在りては交際よりはなれ世間より遠ざかり只だ思想界にのみ逍遙したる小生が、今度は生徒を相手に致し有志家を相手に致し、ナショナルを携へスintonを手に致し 何時の間にやらカーライルも遠かりウォズワースも遠かりエマルソンも遠かり瞑想より遠かり幽思より遠かり 精神界の進歩を止め徒らに^{あくせ}齟齬として日を送らねばならぬ境遇となりたるは実に不運とや申す可き さり乍ら人は如何なる場合にも人たる可く 神は如何なる場合にも愛たる可きが故に 境遇に由り支配せらるゝは寧ろ当人の凡骨たるを証するまでと思へば 大奮発の勇氣も自ら起り候

佐伯は山水の風景には意外に富み山あり河あり海あり

り 郊外の散歩に至極妙に候

食物は魚類沢山ゆへ毎日さし身の御馳走あり滋養には差しつかへ御座なく候

生徒の気風は未だ十分知れず候へ共一寸見たる処にては昂々然たる大志ある者も見受けず 生徒の中長者の大半は職業を有し或は裁判所に出るとか或は銀行に出るとかにて純全なる学生は少数に御座候 授業は午後三時半より始めて五時半までと、午後八時半より始めて十時半までの四時間に候 講義はナショナル、スセントン万国史へスチング伝 其他文典 読方 別に代数学も受け持ち一週間二十三時間計りの労働に御座候

此の前の教師が変則極まる教師ゆへ生徒の発音や悉く法則を外れ乱暴極まる者に候間 読方には随分骨のをれる授業に候 されどこゝらが新教師の価値ならんか 呵々

教師の椅子に安坐せられもせず信ずるの天職あり 尽すべき義務あり 孜孜^し目的に向て突進する覚悟に候 天佑は頭上にあり忍耐持久徐ろに歩武を進む可きのみに候

と、ある。

独歩は佐伯に着いた当時の不平不満、不安も大分解消して落着いてきたらしい。独歩は先ず佐伯の風光に魅せられ、その上魚が多くしかも新鮮で毎日さし身を食べて心から満足している。この手紙でまた学館の様子がよくわかる。教授課目は独歩が担当した英語、数学の外に漢学と理科と剣道があった。漢学と剣道は中島鼎一郎と言う人が教えていた。この人は初老の人で別に漢学塾を開設していた。理科は当時佐伯高等小学校校長をしていた石田豊城という人が担当していた。独歩は専任教師で教頭で、中島、石田両氏は兼任教師であった。

(つ づ く)

